

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：32304

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830065

研究課題名（和文）学校と教師を支援する教育学的視座の構築－「体験的学習」の活性化に向けて

研究課題名（英文）Construction of Pedagogical perspective for supporting School and Teacher-Toward activation of Experiential learning

研究代表者

石崎 達也（ISHIZAKI TATSUYA）

東京福祉大学・教育学部・助教

研究者番号：50612818

研究成果の概要（和文）：本研究は『他者を「理解する」とは、「他者との関係が理解をあふれ出てゆくこと」を理解することにはかならない』という E.レヴィナスの言説を手がかりに、生徒と教師の教育関係を捉え直す試みとして「教育関係において言語が演じる立場を描写する」活動に関する研究を行った。その結果、テキスト化を介して学校現場における教師の「体験」と生徒の「体験」を互いに交差させ、教師による生徒の語り得ない言葉を解釈する営みをとおして、生徒にとっての「教師」はわかりあえない他者との間における（あるいは体験的学習において）媒介者としての責任を担うことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study researched on the activity which "describes the position which language performs in educational relations" as a trial which reconsider the educational relation between student and teacher, at a key of E. Levinas's statement, "[Understanding] the others, it is exactly, [relation with the others is understanding relation overflows understanding], As a result, "experience" of a teacher and "experience" of a student in the school scene are made to cross mutually through texturizing, by a teacher practice which interprets the language which a student cannot tell, the teacher revealed taking responsibility as an agent for a student between the dis-understanding others (or in experiential learning) .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学、社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育人間学、臨床教育学

キーワード：教育学研究、教育体験、教師教育、体験的学習

1. 研究開始当初の背景

（1）本研究は、「かつて教育を支えていた枠組みが強度を喪失し、自らそれを生み出さねばならないにもかかわらず、その基盤はま

すます脆弱になっている一方、近代性の批判・暴露が意味を持つ局面もポストモダンの『日常化』によって終わっている、という幾重ものジレンマに直面している。」（今井康雄

2000) という日本の教育学におけるポストモダニズムの受容に対する総括を受け、今日の「教育実践」を近代主義とは異なる見方で見立て、これまで多くの教師たちによって積み上げられてきた「教育実践」という肥沃な土壌から新たな教育的意味を生成し、その異なる語り方を模索する「臨床教育学」研究(皇紀夫 2001、2003) および「教育の臨床知」研究(田中智志 2001、2002)の一環に位置づけられる。また、近代主義的教育(学)に関する研究については『教育文化論』(鈴木晶子 2005)に依拠するところが大きい。

(2) これまで研究代表者は、現象学からポストモダニズムへの過渡期の思想家 E.レヴィナス(1906-1995)の思想の影響を受け、「教育場面」そのものが教育の意味を生成する場であるという立場に立ち、「教育場面からの意味生成」の方法論的視座を模索してきた。さらに、彼の思想と教育との関係について、教育における「ケア」概念を提唱したノディングズ(Noddings, N.1984)、ポストモダン思想の観点から近代主義的教育学を再考するスタンディッシュ(Standish, P.1998)とイギリス教育哲学会の一連の研究業績(Egéea-Kuehne, D. 2008)、日本の教育哲学研究における「教育における〈他者〉解釈の研究」(丸山恭司 2001、小野文生 2002)を辿りながら、他者を〈受容〉する自己のあり方についての研究を進めてきている。最近では、レヴィナス思想の観点からイギリスの宗教教育実践に関する研究を行っているストルハン(Strhan, A.2009)との対話をとおして、日本における道徳教育の〈主体性〉の問題を指摘した。

(3) 近年、「理論」と「実践」の乖離という問題がさまざまな学問領域から注目されるようになった。しかし、教育現場では高等教育機関で学習した理論や知識を実際の教育現場で「応用すること」が当然のように求められる一方で、ただ単に「理論」を現場に持ち込むだけでは役に立たないということから「理論」が軽視され、教育的効果は教師個人の実践力の問題として理解されることとなり、結果として教師は自己責任の名の下に批判の目に曝されてしまいかねない。このような傾向に対して学校と教師を支援するために「理論」の応用としての「実践」という考え方は異なる研究視座が求められている。そこで本研究では、研究代表者が実際の教育現場に身を置きながら「理論」と「実践」の乖離の問題、「不登校」や「発達障害」の問題について考察を深めてきた経験をふまえ、個別の「教育場面」において、教師と生徒がどのように関わり合っているかということを共有するフィールドを設定(=テキスト化)し、そのフィールドを教育のあるべき姿を追求する従来の教育学とは異なる視

点から読みなおすこと(=「教育言説」「教育実践」の脱構築)で、教育哲学・思想研究による学校と教師を支援する試みとしての「教育場面」の解釈の仕方、語り方を生み出すこと(=「教育場面」からの意味生成)を目的としている。

2. 研究の目的

(1) 教育における「体験」という言葉のあり方を明らかにする。近代主義的教育(学)においては「文化」を教え込むこと自体が「教育」そのものであったと言っても過言ではない。そのために「文化」の外部として理解を超えたところにある「自然」にふれる「体験」の意味は従来の枠組みでは捉えきれないものを含み込んでいると考えられる。そこで、「文化」と「自然」を学ぶ「体験的学習」の調査をとおして今日の教育における「体験」という言葉のあり方を明らかにする。

(2) 「教育場面」のテキスト化という方法論の有効性を明らかにする。教育現場に一定の枠組みを当てはめるのではなく、現場からの「声」を丁寧に聴き取り、読み解く作業を行う。具体的には特別な教育的支援を必要とする生徒と彼らにかかわる教師に対する調査をとおして「教育場面」における生徒と教師の関係性のテキスト化を試み、「基礎研究」で練り上げた視点から再解釈を行うという方法の問題点と有効性を明らかにする。

(3) 「教育場面」のテキスト化がもたらす、教師の「体験としての自己変容」を明らかにする。テキスト化された「教育場面」を教師と共有し、自己のあり方や他者とのかかわり方をふりかえるとともに、本研究の過程における教師と生徒の関係性の変容を考察する。この観点については、『自己変容という物語』(矢野智司 2000)の研究成果が重要な先行研究となる。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、精緻かつ発展的な研究を行うための3つの段階「基礎研究」「調査研究」「開発研究」を設定する。

(1) 「基礎研究」においては、本研究の方法論としての言語的な枠組みと研究全体を見渡すパースペクティブを得るための「文献研究」を行う。

(2) 「調査研究」においては、特別な教育的支援を必要とする生徒とかかわる「教育場面」をフィールドとして設定し、質問紙法・参与観察およびエピソード記述等の手法を用いてデータを収集し、グラウンデッド・セオリー・アプローチやレトリック論の観点から分析を行う。本調査研究にあたっては、広域通信制・単位制高等学校 ECC 学園高等学校(滋賀県高島市/玉垣勝校長)に研究協力を依頼している。

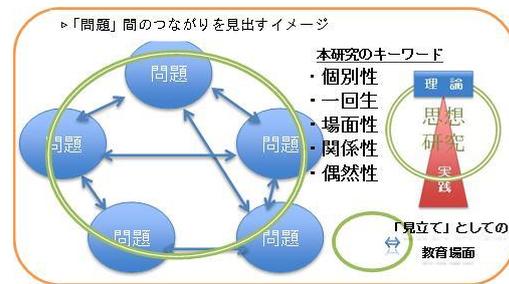
(3)「開発研究」では、データ結果をもとに、独自の「総合的な学習の時間」の授業プランを開発する。高等学校の「総合的な学習の時間」においては主体的な自己形成＝「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」(文部科学省)が目標とされているが、さらに、自己のあり方や生き方を考えるために「世代を超えた持続可能な地域社会を構築するため学びの場」を実現し、「自らが他者とのつながりのなかで生きている存在であること」の確かな感覚が形成されることを目指した授業プランを策定する。開発研究にあたっては、従来の「学習・観察モデル」ではなく、今回の「調査研究」で得られた成果をもとに高齢者や地域の人々との「交流」「協働」に焦点化した「総合的な学習の時間」の授業実践を行う。研究協力校の所在地である里山地域において農作業などの自然とかかわる仕事に生徒とともに従事する。可能な限り検証授業を実施し、その有効性を検証し改善を図る。

研究方法			
	方法	対象	内容
第1段階	授業の実施	ECC学園高等学校に在籍する生徒(約100名)	「総合的な学習の時間」等の授業実践
第2段階	アンケート(記述式)の実施	ECC学園高等学校に在籍する生徒(約100名)	授業の興味深かった点はどこか。 (授業内容や授業方法について)
	インタビューの実施		授業をとおして学んだことの感想か。 授業と自分の学びが結びついていないこと、気づかずにいることは何か。 「学校」に対するイメージ
	アンケート(記述式)の実施		「高校」に入塾して良かった点 がなかった点、以て「高校」とのちがいが あるか。
	インタビューの実施		自分が思う理想的「学校」とは？ 自分自身の課題について。 将来の夢
第3段階	記述内容ならびに分析結果を検証	研究者・研究協力者・教員	日頃、生徒との関わりにおいて「楽しい」と感じていることは何か。 授業に思いがけず気づいていることは何か。 生徒の成長に思いがけず気づいていることは何か。 「学校」に対するイメージ 自分が思う理想的「学校」とは？ 自分自身の課題について。 教員としての役割について。

4. 研究成果

本研究の目的は、①教育思想研究をとおして「教育場面」再解釈の視座を構築すること。②「教育体験」のテキスト化を行う調査研究をとおして臨床教育(学)的方法論を確立すること。そして③生徒と教師の「交流・協働」に焦点化した授業開発を行うこと。この3つの段階を設定し、それぞれの研究の性質の相違に注意深く配慮しつつ複合的研究を行うことにより、「学校」と「教師」を支援することに焦点化した教育学研究の枠組みを構築することにあつた。①の基礎研究の成果に関しては、Joy. A. Palmer ed., “Fifty Modern Thinkers-From Piaget to the Present”, (Routledge, 2001.)の翻訳作業に携わり、近代主義的教育(学)における「理論」と「実践」の乖離という主題を考察するための多様な視座を得るとともに、E. レヴィナスの思想研究を手がかりとした「教育場面」の再解釈に関する研究を日本教育学会で発表した。②

の「教育体験」のテキスト化に関する調査研究に関しては、研究協力校において2年間にわたり調査を実施した。まず、生徒対象の調査研究については、生徒とともに体験的活動を行う過程で、生徒自身に「教育体験」を記述してもらった。また、教師対象の調査研究に関しては、研究協力校における教員研修会において、生徒の「声」を聴く場面を設定するとともに教師自身に「教育体験」を記述する機会を提供した。この一連の調査から、教師個人の「教育体験」が生徒とのかかわりに与える影響について考察した。この調査の過程で、広岡義之編『教育実践に役立つ生徒指導・進路指導論』において、「学校における進路指導の新たな展開」部分を執筆し、今後のキャリア教育のあり方について論じた。そして、③に関しては、調査結果に基づき資料を作成したが、今後の授業開発を行う際の基礎資料を提供することに止まった。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

石崎達也、教師という「体験」を語り直す思考のために—生徒と教師の倫理的関係に着目して

日本教育学会 平成24年8月26日、名古屋大学

[図書] (計1件)

広岡義之編著、あいり出版、新しい生徒指導、2013、(7章 pp.103-123、11章 pp.171-199)

[その他]

(翻訳) リオラ・プレスラー他著、広岡義之編著、青土社、教育思想の50人2012、494 (翻訳分担 石崎達也)

(アウトリーチ活動) 平成24年度東京福祉大学教員免許更新講習「人間としての生き方 在り方教育-震災以後、教育を「人間の在り方」

の次元に引き寄せて語り直すために」、平成24
年8月6日、東京福祉大学

(ホームページ) Educ.Relation

(<https://sites.google.com/site/educrelation/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石崎達也 (TATSUYA ISHIZAKI)
東京福祉大学・教育学部・助教
研究者番号：50612818

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：